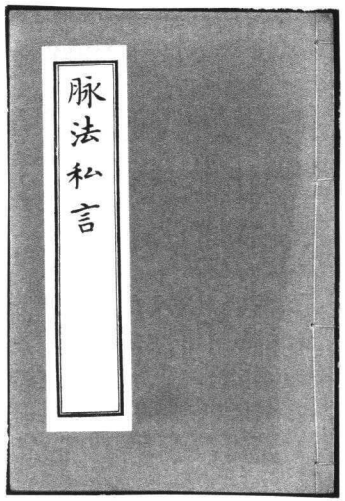
浅田宗伯（あさだそうはく）　漢方醫。文化十一年五月二十一日信濃國筑摩郡栗林村生れ、明治二十七年三月十六日歿（一八五一―一九四）。諱惟常、字識此、初名直民。號栗園、栗園外史、栗翁、浅田常、源惟常、田常、田惟常、虚舟等。中村中倫、中西深齋に醫を學び、猪飼敬所、頼山陽に就き經書、史學を修め、歸郷して開業。その後江戸に出て有力醫と親交を結び醫學館に出仕。奥醫師に累進して法眼に叙せられた。維新後は、明宮（はるのみや）（大正天皇）誕生以來東宮侍醫を務め、漢方醫界の大御所的存在となった。

著書に『脉法私言』（黒岩静山・山邊三子之校、明治十四年十一月浅田宗叔出版、輔仁社活版「栗園雜著之一」）等の他、原田稔甫著『浅田宗伯先生と皇漢醫學會』（昭和六年二月十五日付刊、皇漢醫學會）がある。